

2014 年度

ふくしま復興塾 第2期事業報告書



目 次

1	2014年度ふくしま復興塾概要	2
2	プログラム実施報告	3
3	県外先進事例フィールドワーク報告	9
4	最終発表会報告	14
5	実施結果	33

はじめに



ふくしま復興塾実行委員長

加藤 博敏

福島を襲った未曾有の災害は放射線という深刻な被害をもたらし、未だその収束は見えず、未だ福島の未来を想像することはできません。

福島を去る人、残る人、家族がばらばらになってしまう人、仕事を失う人、様々な人達があります。その過酷な運命の中で、今も厳然として福島で生まれ育つ若者達があります。

逆境が人を作ると言います。そして今の福島以上の逆境はありません。だとすれば福島からは将来有為な人材が生まれるはずです。もっと言えば、有為な人材が生まれて、その人達が福島の未来を創ってゆかなければなりません。

福島の逆境が、福島や日本の未来を創るリーダーを育てなければ、福島に生きる人の過酷な運命とのバランスが取れません。

幕末北越戦争戊辰戦争で敗れた長岡藩は減知され、実収にして6割を失いました。財政は窮乏し、藩士たちは日々の食事にも事欠く始末でした。見かねた長岡藩の支藩から百俵の米が贈られました。藩士たちは喜びましたが藩の大参事小林虎三郎は、贈られた米を売却の上で学校設立の費用とすることを決定しました。藩士たちは反発して抗議しますが、虎三郎は「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭しました。「越後の米百表」のいわれです。

このプロジェクトは、「福島の米百表」福島の若者を育てるプロジェクトです。福島の若者に「本物」に出会う機会を作り、そこから福島の若者が刺激を受け、大きく育つ。

「30年後の日本のリーダーは福島から出る」ということを信じて、このプロジェクトをスタートしたいと思います。

1-1 ■ 背景と目的

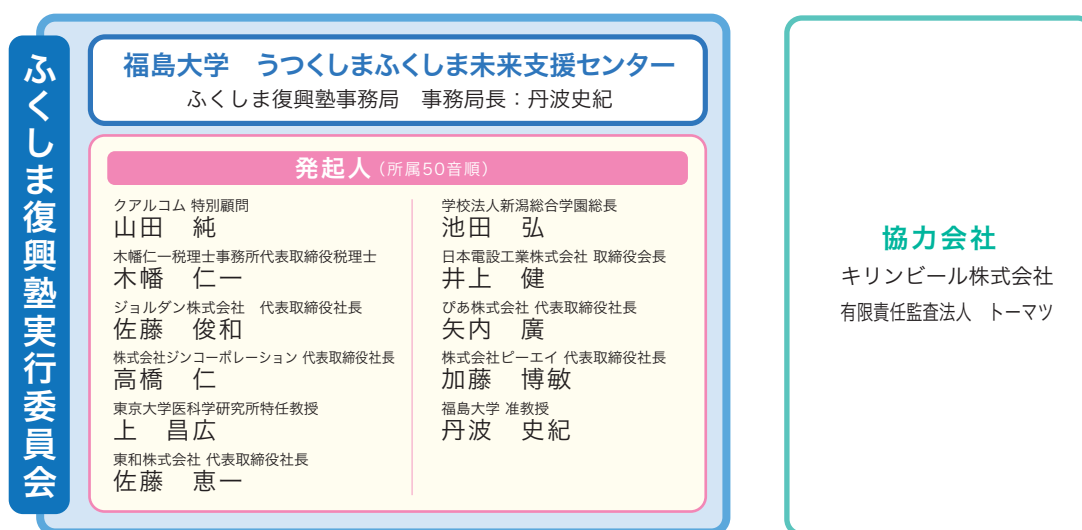
福島県は、2011年3月11日の地震・津波、さらに翌日の原発事故後、世界に類を見ない危機的な状況に瀕しています。そんな福島も、震災後4年が経過し、地域による差はあるものの、ある程度復旧フェーズは終えたといえるでしょう。今後の福島は、経済・文化・政策等多様な分野で復興のフェーズに入らなければなりません。しかし、復興を進めていくリーダーとなる若い人材は不足しています。また、福島の課題は日本や世界の課題とすることができ、福島の課題を解決することは、世界的にも大きな意義があるといえます。

このような背景からふくしま復興塾は、①福島の現状を捉えた上で、福島復興に取り組む志と覚悟を持ったリーダーを育成する、②人類史上稀に見る原発災害が発生した福島だからこそ、顕在化してきたニーズや課題を解決する事業を起こす、の2点を目的として開講しました。

第1期は2013年5月から12月に実施し、今年度の第2期を2014年5月から11月に開講しました。

1-2 ■ 組織

ふくしま復興塾は、福島に縁のある経営者を中心とする発起人の呼びかけのもと、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター内に事務局を置き発足しました。また、協力企業として、キリンビール株式会社様・有限責任監査法人トーマツ様のご支援をいただいています。



1-3 ■ 企画概要

2014年度のふくしま復興塾は、起業家や民間企業の社員を主対象とする民間領域コースと、行政職員やNPO職員を主対象とする公共領域コースを開設し、計19名の若者を塾生として迎えました。塾生は、約半年のプログラムを通して、民間領域では事業プランの作成、公共領域では政策プランの作成を目指しました。プログラムは、5月から11月まで、基本的に月1回、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター会議室等で講座を開講しました。また、今期より第1期の卒業生のメンターと有限責任監査法人トーマツ様のメンターを迎え、講座の他に月1回のチームミーティングで、各塾生のプランのブラッシュアップを行いました。

2 プログラム実施報告

日 付	担 当	内 容
5月17～18日	株式会社umari 木戸 寛孝 様 株式会社イワ・クリエイティブ 松田 創 様	スタートアップ合宿 復興に求められる新たな手法と世界観を知り、イノベーションとは何かを学ぶ
6月14日	浪江町役場 小林 直樹 様 蒲原 文崇 様 金山 信一 様 大浦 龍爾 様 松本 幸徳 様	福島の実状を考えるフィールドワーク 相双地域へのフィールドワークを通して、震災や原子力災害当初やその後の経過を直視し、福島の実状に対しての理解を深める
民間 7月5日 公共 7月12日	民間 日本電設工業株式会社 井上 健 様 株式会社ジンコーポレーション 高橋 仁 様 公共 福島県庁 玉川 啓 様 一般社団法人RCF復興支援チーム 山本慎一郎 様 福島大学 朴 相賢 様 棚橋 智春 様 丹波 史紀 様	先人の経営者や行政職員の経験の共有 福島発の起業家や震災後の対応で活躍した行政職員から、福島の課題に対して事業や施策を立案・実行した経験を学ぶ 福島の主要なテーマ(食・コミュニティ)について、専門家から概論的な知識を学ぶ
8月18～20日	ふくしま復興塾事務局	県外先進事例フィールドワーク 地域課題を政策的・ビジネス的に解決した先進事例(大分県佐伯市・佐賀県武雄市・有田町)を比較対象として、塾生のプランを深める
9月13日	株式会社電通 新井 祐一 様 木幡仁一税理士事務所 木幡 仁一 様	事業や政策プラン作成についての講義・実践 マーケティング・ニーズ調査や、事業計画書作成の方法を学ぶ
10月11日	ふくしま復興塾事務局	塾生のプランに対するフィードバック会 塾生・メンターでプランの現状を相互に共有し、ブラッシュアップを行う
11月29日	ふくしま復興塾事務局	最終発表会 塾生の事業プラン、政策プランの発表を行う

2-1 ■ 各プログラムの概要

スタートアップ合宿 (5月17日～18日)

5月17日に、ふくしま復興塾の第2期が開講しました。当日は主催者側として、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターと、ふくしま復興塾発起人から挨拶がありました。続いて、協力企業である麒麟株式会社執行役員CSV推進部長の栗原様より来賓挨拶をいただきました。その後、塾生やメンター等で福島復興にかける思いと共に自己紹介を行いました。

合宿2日目となる5月18日は、「4年目を迎えた今、復興に求められる新たな手法と世界観～イノベーションとは何か～」という題で、株式会社umariの木戸様に講義をいただきました。その後実践として、株式会社イワ・クリエイティブの松田社長によるイノベーションを起こす手法である「クリエイティブシンキング」のワークショップを実施しました。



麒麟株式会社 栗原様のご挨拶



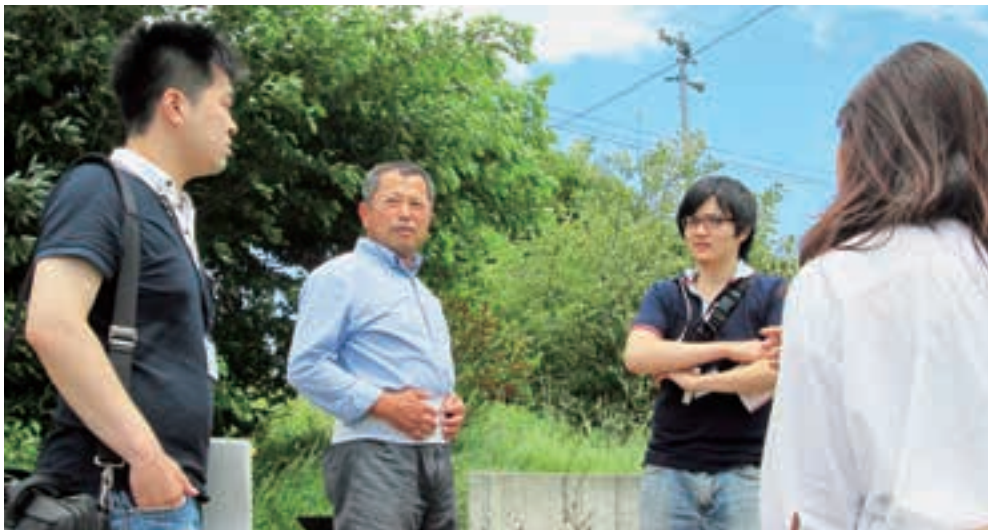
クリエイティブシンキングのワーク

福島現状を考えるフィールドワーク (6月14日)

旧警戒区域である浪江町へのフィールドワークを実施しました。当日は郡山駅に集合してバスに乗り、いわき市から国道6号線を北上し、福島第一原子力発電所付近を通過して浪江町に入りました。

浪江町内では、まずはサラダ農園を訪問し、川村所長からお話を伺いました。サラダ農園は、震災前に浪江町で野菜等を生産していましたが、震災後に立ち入りが制限されたことによって避難を余儀なくされました。しかし、町への立ち入りが許可されると同時に農園を再開し、現在は鶏卵や花の出荷にまで至っています。

その後、「農林水産」・「商工観光」・「まちづくり」・「原子力災害」の関心テーマに分かれて、各分野を担当する浪江町職員の方々の案内で、町内を見学させていただきました。



サラダ農園川村様よりお話を聞く塾生



浪江町役場の皆様から話を聞く塾生

先人の経営者や行政職員の経験の共有 (7月5日、12日)

7月5日は、民間領域コースの講座として、日本電設工業株式会社の井上会長と、株式会社ジンコーポレーションの高橋社長より、新規事業の立上げのご経験をお話いただきました。井上会長からは、JR時代にsuica導入を実現した事例等を交えながら、大企業の中で新規事業を立案・実行することについて学びました。高橋社長からは、郡山に第1号店を開設し、現在は業界トップにまで拡大した脱毛サロンのミュゼプラチナムを立ち上げたご経験をもとに、地方から起業することについて学びました。

7月12日には、公共領域コースの講座として、福島県庁(前浪江町復興推進課主幹)の玉川様と、一般社団法人RCF復興支援チームの山本様より、震災後に民間や行政が連携してプロジェクトを推進されたご経験をお話いただきました。その後、福島大学の教員より、福島県内の主要な課題となっている食とコミュニティについての概論の講義を行いました。

その後、民間領域コース・公共領域コースそれぞれの中間発表を行いました。



ジンコーポレーション高橋様の講義



中間発表

県外先進事例フィールドワーク (8月18日～20日)

民間と公共それぞれの分野で先進的な取り組みをしている九州の3地域(大分県佐伯市・佐賀県武雄市・佐賀県有田町)を訪問しました。(詳しくは、「3 県外先進事例フィールドワーク報告」を参照)

事業や政策プラン作成についての講義・実践 (9月13日)

塾生が立案しているプランがより実現に近づくように、株式会社電通の新井様より最新のマーケティングについての講義をいただき、塾生のプランをケーススタディとしてアドバイスをいただきました。その後木幡税理士から、事業計画策定について基礎から講義をいただき、キャッシュフローについて学べるワークを行いました。



税理士の木幡様の講義



電通の新井様から塾生へのフィードバック

各塾生のプランに対するフィードバック会 (10月11日)

最終発表会に向けて、各塾生のプランをブラッシュアップするため、有限責任監査法人トーマツ様と、第1期生の卒業生のメンターによってフィードバックを行いました。



塾生のプレゼンテーション



メンターからのフィードバック

3

県外先進事例フィールドワーク報告

県外先進事例フィールドワークには、塾生・メンター・事務局の総勢18名が参加しました。8月18日～20日(福岡空港集合・解散)で行いました。現地での行程は下表の通りです。

日 付	訪 問 先	講 師
8月18日	大分県佐伯市	・ 糀屋本店 浅利妙峰様、浅利良得様 ・ KONEN corporation. 浅利善然様
8月19日	佐賀県武雄市	・ 武雄市役所 山田恭輔様 ・ 武雄市立御舟が丘小学校 市瀬次生様
8月20日	佐賀県有田町	・ 佐賀ダンボール商会 石川慶蔵様

3-1 ■ 現地での講義

大分県佐伯市 糀屋本店

糀屋本店は、大分県佐伯市で320年以上の歴史を持つ糀屋で、塩糀ブームの火付け役となり、日本だけでなく世界に進出しています。

最初に「～経営視点～ 温故知新、伝統を現代に送り出す」というテーマで9代目である浅利妙峰様から、糀屋本店の歴史と、塩糀開発の裏側についてお話していただきました。

家庭で醤油や味噌を作るという文化がなくなり、糀屋の経営が難しくなってきた中で、江戸時代の書物からヒントを得て、塩糀を開発されました。また、その作り方を自社のみに秘匿せず、日本や世界へ向けての発信や、自ら料理教室を開くなどし、塩糀さらには糀文化の普及に努めています。古いものの中から新しいものを生み出す温故知新の心得や、必ず物事を解決する強い意志を持つことの大切さを学びました。

次に10代目の浅利良得様からは「～地域視点～ 地域と糀屋、代を継ぐこと」というテーマでお話いただきました。大学時代にまちづくりを学んでいく中で、衰退していく地域の姿に危機感を覚えたことから、糀屋を継ぐこと、地域を継ぐことを決意し、10代目として奮闘されています。佐伯の人たちのおかげで続いてきた糀屋であり、自身も育てられてきたので恩返しをしたい、佐伯の食文化を守ってきた糀屋を守りたい、伝えていきたいという熱い思いが伝わりました。

最後に、Uターンで地元にもどり、コンサルティング会社であるKOKEN corporationを起業した浅利善然様に「～社会起業家～ 経営コンサルタントとして」というテーマでお話いただきました。ビジネスの面で糀屋を支える、佐伯を支える具体的な施策などを伺いました。地域企業の経済的発展を目標に、佐伯の企業のためにマーケティング等の分野でコンサルティングをされています。



花屋本店の浅利妙峰様と塾生



花屋本店の前での集合写真

佐賀県武雄市

地方分権化を進め、さまざまな分野で改革を進める武雄市役所を訪問しました。

まず樋渡市長からふくしま復興塾に向けて、ビデオメッセージをいただきました。「革命は辺境からしか生まれない。地域からしか本当のことは生まれない」という激励のメッセージをいただき、隔たりや境目をなくし、やる気のある人といかに組むことが大切かを考えさせられました。

その後、つながる部企画課長兼フェイスブック・シティ課長の山田恭輔様にご講演をいただきました。山田様には、自治体としての先進的な取り組みや、その裏にある考え方、チーム力についてお話いただきました。

武雄市では、ほとんどの職員がツイッターやフェイスブックのアカウントを取得しています。フェイスブックをひとつのツールとして、市民と市長、市民と職員、市民と市民など、さまざまな「つながり」が生まれ、双方向のコミュニケーションを実現しています。

これは、市長が職員に対して明確な目標を指し示しているだけではなく、職員ひとりひとりが「できない理由を探すのではなく、できる理由を考える」といったマインドを持っているからだということが分かりました。リーダーシップを支えるフォロワーシップ、メンバーシップが欠かせないということを学んだ貴重な時間となりました。

次に訪問したのは、スマイル学習を取り入れた小学校のひとつ、武雄市立御舟が丘小学校です。スマイル学習は、タブレット端末を家庭に持ち帰り、動画による予習を終えてから授業に臨む「反転学習」方法で、武雄市では今年からすべての児童にタブレット端末を配布しています。スマイル学習の概要と実践の様子について、教頭の市瀬次生先生にご講演いただきました。

スマイル学習は、授業で協働的な問題解決能力を育成することを第一に、児童がより意欲的に授業に臨めること、教員が学習者の実態を正確に把握して授業に臨めることを狙いとしています。

最後に訪問をしたのは、全国でも有名な「武雄市図書館」です。武雄市図書館は、TSUTAYA等を経営する民間企業のカルチャ・コンビニエンス・クラブ(CCC)が受託運営をしています。図書館利用者を顧客とみなし、質の高い読書体験の提供に徹底的にこだわった新しい取り組みを視察しました。



御舟が丘小学校の市瀬先生の講義



武雄市図書館での集合写真

佐賀県有田町 佐賀ダンボール商会

佐賀県有田町は、人口2万1千人余りの小さな町ですが、有田焼の窯元は100軒近くあり、人口の6割は何らかの形で陶磁器に関わる仕事をしています。

そんな町でライフスタイルの変化や輸入食器の増加などが原因で衰退していた有田の窯物業界存亡の危機に活路を見出したのが、佐賀ダンボール商会の石川慶蔵社長です。

石川社長には、「世界に羽ばたけ！有田焼～松下幸之助哲学に学ぶ有田焼再生と商品開発物語～」というテーマで講義をいただきました。

もともと有田焼の商品の箱をつくっていたという石川社長は、有田焼の復活ひいては有田町の活性化のため、「400年後の人たちが感動をする世界初の万華鏡をつくろう」と、異業種10社を巻き込み、有田焼の万華鏡をはじめ、ボールペンや時計など世界でも類をみないコラボ商品を開発し、成功させました。

石川社長は、県や焼き物の専門家、マーケティングの専門家などに「有田焼で万華鏡なんて難しい、無理だ」と言われながらも、夢を叶えるため、松下幸之助の言葉を胸に努力を続けたそうです。石川社長のお話から、事業を成し遂げるためには、ひとつの思想・哲学を軸として持ち、周りに訴え続ける、行動し続けることが必要であることを学びました。

石川社長の講演後は、有田焼を生産する源右衛門窯を見学させていただき、工程を実際に見ることで、有田焼の価値と歴史の重みを肌で感じることができました。



有田焼の万華鏡を手にする塾生



有田焼の窯の見学

3-2 ■ 参加者の感想

福島県庁 根本 忠さん

大分県佐伯市では、妙峰さんのかけ声とともに童謡「ふるさと」の合唱から始まった講義でしたが、糀という昔から当たり前のように僕たちの生活の身の回りにありながら、実は身近になかった調味料で忘れかけていた日本人の食文化を取り戻そうという「強い意思」とそれを実現していこうという意志を強く感じました。ノーベル平和賞をとると公言し、それを本当にとれると信じてサポートし、家業を継いでいる息子さんたちの姿は、理想的な家族経営の姿であり、こういった経営が周囲にも派生していくことで、地域の中での絆が広がっていくと実感しました。



佐賀県武雄市については、6月にいわき市で開催された樋渡市長の講演会をきっかけに改めて武雄市の取組や施策について興味を持っていましたが、一番の興味はあれだけのリーダーシップをもったトップのもとで、職員の皆さんがどういったモチベーションで働いているのかという点でした。通常、行政の人間の多くは変革を必要だと認識していながらも、実際、それを実行に移そうとするときは、「出来ない理由」を掲げて、現状維持に陥るパターンが多い中で、武雄市役所の職員の多くは「半ば諦め」という形でありながらも、そのマインドを変えているという点は興味深かったです。

また、様々な取り組みに対してトップが責任を持つからとりあえずやってみるという姿勢は、今後の自分が行政の人間として常に持っていくべきマインドであると思いました。

また、武雄市図書館は、予想以上にすてきな雰囲気であり、子供からお年寄りまで、多くの方が飲み物を片手に図書館で談笑している姿は、新たな図書館のスタイルであると思いました。

佐賀県有田町については、自分が福島県の伝統産業振興を担当して3年目となる中で、福島県内の伝統産業に活かせる取組が何かあるかという視点で話を伺ったが、やはり、必要なのは、産地をどのようにしていきたいのかという個の熱い想いなのだと思います。今回は外部の人間が、その想いにかかれて本気になって産地振興に取り組んできた結果が新たな商品価値を作り出しているが、伝統産業の産地は産地の中ではどうしても足の引っ張り合いが起きてしまう中で、外部の人材がうまく産地の中を巻き込むことで新たな視点での気づきが産まれていくのではないかと思います。

今回のFWを通して自分自身の事業計画に活かしていく内容としては、如何にして多くの人を巻き込み、如何にして計画を具体化していくのかというそのプロセスであると思いました。行政という立場上、どうしても周囲との調整に行動がいきがちですが、調整だけではなく、巻き込みという視点で、相手のやる気を奮い起こさせる計画の内容や自分自身の熱意を周囲に伝えていきたいと思います。

4 最終発表会報告

ふくしま復興塾第2期最終発表会は、2014年11月29日に郡山市の市民交流プラザ大会議室にて開催しました。当日は、来賓として衆議院の玄葉光一郎議員や郡山市の品川萬里市長をはじめ、総勢130名を越える方にご参加いただきました。当日は、以下の①～⑧までのプロジェクトが各15分程度の全体発表を行った他、14プロジェクトがポスター発表を実施しました。

発表プロジェクト

	プロジェクト名	塾 生	所 属
1	月2,000円で農家のプロデューサーになれるwebサービス ～福島に“つながる”弁当から得た“つながり”、“経験”を活かした第2フェーズへ～	馬場 大治	株式会社 concept-village
2	ふくしまからはじめる地域力を再生する未来支援プロジェクト 地域コーディネーター職員の派遣事業	遠宮 昭則	郡山市
3	ふたばぐるぐるプロジェクト ～若者協議会～	芳門 里美	一般社団法人 RCF復興支援チーム
4	街づくりのための循環送迎車両プロジェクト 高齢者がいつまでも繋がりをあえるために。 お金で買えない価値がある。本当の価値はプライスレス。	島田頼於奈	島田眼科医院
5	民間と行政が連携した工芸品ブランドづくり	根本 忠	福島県
6	311からIIEへ 福島からものづくりを通して新しい価値観とライフスタイルを発信していく	谷津 拓郎	株式会社IIE
7	福島県浪江町の伝統工芸品 大堀相馬焼海外展開事業プロジェクト	亀田 周	独立行政法人 日本貿易振興機構
8	家族がつながる魔法のお絵かきアプリ 「おえかきマジックコレクション“マジコレ”」	菅家 元志	株式会社 Plainnovation
9	酒粕を活用したメンズ スキンケアブランド	中村 優太	株式会社 東日本朝日広告社
10	～『ものづくり』で『こども』を英雄へ～プロジェクト	高橋 翔	株式会社 アルストロメリア
11	河内ぶどうレーズンサンドによる収益改善	奥野 成樹	アルパイン株式会社
12	ふくしまワイナリー設立による、モデル事業	宇津木政人	japanese wine bar regaletto
13	味わう。学ぶ。ふくしま59ヶ所まるごと塾	三瓶 恵	郡山医療 生活協同組合
14	福島発!タブレット講座～潜在的な社会課題の解決～	浜中 圭助	株式会社 アールラーニング



全体発表の様子(芳門里美さん)



ポスター発表の様子(浜中圭助さん)



ポスター発表の様子(奥野成樹さん)

4-1 ■ 各賞受賞者

ふくしま復興塾実行委員会と協力企業の皆様での協議の結果、以下の5名が賞を受賞しました。

◆ふくしま復興塾グランプリ

谷津拓郎さん、「311からIIEへ 福島からものづくりを通して新しい価値観とライフスタイルを発信していく」

◆ふくしま復興塾準グランプリ

亀田周さん、「福島県浪江町の伝統工芸品 大堀相馬焼海外展開事業プロジェクト」

島田頼於奈さん、「街づくりのための循環送迎車輛プロジェクト 高齢者がいつまでも繋がりあえるために。お金で買えない価値がある。本当の価値はプライスレス。」

◆KIRIN賞

馬場大治さん、「月2,000円で農家のプロデューサーになれるwebサービス ～福島に“つながる”弁当から得た“つながり”、“経験”を活かした第2フェーズへ～」

◆トーマツ賞

菅家元志さん、「家族がつながる魔法のお絵かきアプリ 『おえかきマジックコレクション“マジコレ”』」



グランプリを受賞した谷津拓郎さん(左)と復興塾実行委員長の加藤(右)



各賞を受賞した(左から)谷津さん、亀田さん、島田さん、馬場さん、菅家さん

4-2 ■ アンケート結果

来場者の皆様のアンケートで、以下のような感想をいただきました。

「とにかく熱いイベントでした。すでに商談会のように意気込みでプランに終わらないかを感じました。」

「浪江町の人間なので、浪江のものに引かれてしまいました。すべてを失った私たちに希望のもてる提案をいただいたことを非常にうれしく思っています。」(30代男性)

「一番嬉しかったのは地元出身、又は地元に住んでいる若い方々が頑張っているという事です。ほんとに今日感動させて頂きました。どんどんビジネスになる事を願います。」

「若い世代から、たくさんのアイデアを聞かせていただき大変勉強になりました。また、事務局、スタッフの皆様も大変お疲れ様でした。若い世代から、これだけのアイデアが出てくるのですから、私たちの世代も負けずに知恵を出さなければいけないと思います。よい刺激をいただき、ありがとうございました。」(40代男性)

4-3 ■ 塾生の発表プロジェクト

5 実施結果

5-1 ■ 塾生からの声

郡山市役所 **遠宮 昭則さん**

ふくしま復興塾に入塾する前から、郡山市役所でNPOや市民活動関連の課に所属しており、市民と行政のプラットフォームを作りたいという想いを持っていました。講義で、福島で活躍する先輩行政職員等の話を聞く中で、行政の立ち位置を理解し、自分のやりたいことの必要性を再認識しました。プロジェクト立案に際しては、公共・民間の枠を超えた様々な人たちとの意見交換やメンター陣からの充実したサポートもあり、最終発表では「地域コーディネーター職員の派遣事業」を発表することができました。この事業は、市役所職員が地域に飛び込み、市民と一緒に課題を聞き一緒に解決することを目指すもので、平成27年度から郡山市の新規事業として活動を開始します。今後は地方創生の部署を作る等、自分を含めて更に積極的に地域に入っていく職員を増やしていきたいです。

(プランについては19ページを参照)



株式会社concept-village **馬場 大治さん**

ふくしま復興塾では、第1期から継続して参加しています。第1期の最終発表会では、オール福島産の食材を使った福島に“つながる”弁当を開発しました。その経験から、福島産品の6次化プロデューサーになりたいと考えていましたが、既存の広告会社のモデルを脱することができなかったことが悩みでした。第2期にも入塾して、生産者の求めるニーズの抽出をメンターと一緒にできたことで道が開けました。提案した「月 2,000円で農家のプロデューサーになれるwebサービス」では、福島発で他の地域にもスケールアウトする可能性もあるプランにすることができたと思います。

復興塾では、発起人等の人脈とメンターのサポート機能を使い尽くしたうちの1人だと思います。

(プランについては18ページを参照)



5-2 ■ メンターからの声

郡山医療生活協同組合 **小拔 勝洋さん**

ふくしま復興塾には、第1期に塾生として参加した経験を活かし、2期はメンターとして関わりました。

客観的に塾生をみていて、講義はもちろんのこと自分のプロジェクトをプレゼンしフィードバックをもらうことで、プロジェクト内容の精度があがっていくのを実感しました。1期と比較すると、2期では最終発表で目に見える結果を出せたプロジェクトが多かったことが大きな変化です。

復興塾に参加すると、発起人や講師等、復興塾に入らなければ出会えないであろう人たちと繋がりができることがあります。自分のやりたいことと、その貴重な繋がりを広げていく人たちが増えれば、福島はもっと面白くなるのではないかと思います。



有限責任監査法人トーマツ **小池 裕二さん**

ふくしま復興塾にメンターという立場で関わり、塾生に寄り添い、奔走し、事業構想のブラッシュアップするお手伝いをさせて頂きました。開講当初は、福島復興に向けた思いが先行していた塾生でしたが、半年間にわたる講義やフィールドワーク、そしてメンターや塾生相互の対話を通じて徐々に考えが整理され、人に伝わり共感と呼ぶ構想ができあがる過程をみて、とても頼もしく感じました。

ふくしま復興塾は、福島県内外から、福島の将来を考えチャレンジ精神に富んだ若い塾生が集う、エネルギーに溢れた「場」であり、大きな可能性を感じています。ふくしま復興塾で生まれる福島県の内・外、世代を超えたタテ・ヨコの繋がりが、10年後、20年後の福島を創る原動力になることを祈っています。





3(木)

毎日新聞

【第3版】

オピニオン

本日は… 第1週 福島復興論 第2週 政界人物評論 第3週 大災害の時代 第4週 月刊時論フォーラム

福島復興論

「復興」の語に込められた思いや、被災者の苦しみや希望、復興の道筋など、被災者や関係者の声や意見を掲載する。しほのへに「復興」の語に込められた思いや、被災者の苦しみや希望、復興の道筋など、被災者や関係者の声や意見を掲載する。

「復興」の語に込められた思いや、被災者の苦しみや希望、復興の道筋など、被災者や関係者の声や意見を掲載する。



山内 幸治さん

被災地に「右腕」を派遣
NPO法人ETIC、理事
やまうち こうじ 1979年横浜市生まれ。早稲田大教育系。在学中からETICの事業化に参画。約年に起業家育成に向けた長期実践型インターンシップ創設。2009年のNPO法人化に伴い事業継続ディレクター。11年の震災後、被災地の復興リーダー支援のための「右腕派遣」事業開始。13年より現職。



加藤 博敏さん

「ふくしま復興塾」実行委員長
ピーエイ社長
かとう ひろとし 1958年福島市生まれ。福島大経済学卒業後、厚生入会。同年に有限会社ピーエイを設立し社長に。69年に株式会社化。2000年東証マザーズ上場。東北・関東や首都圏で紙媒体やネットによる就職情報サービスや人材派遣を行う。13年「ふくしま復興塾」を発足させ人材育成にあたる。

対談

「逆境の地で人材育てる」

日本のリーダー育てたい 語り合う出会いの場作る

「復興」の語に込められた思いや、被災者の苦しみや希望、復興の道筋など、被災者や関係者の声や意見を掲載する。

かつてない「東北の熱量」 力発揮できる場作り大事

「復興」の語に込められた思いや、被災者の苦しみや希望、復興の道筋など、被災者や関係者の声や意見を掲載する。

① ふくしま復興塾

福島県に縁のある経営者らが発起人となり、福島大学つくしまふくしま未来支援センターに事務局を置いて発足した人材育成事業。20～30代の若者を対象、復興リーダーや福島復興の課題を解決する起業・社会起業家の育成をめざす。昨年度は1期生25人が受講、12月の最終発表会でそれぞれプロジェクトを発表した。今年度は2期生、サリビールが資金協力している。

② 「右腕派遣」プログラム

起業家・社会起業家を育成・支援するNPO法人ETIC、(宮城県門田郡)が震災を機に始めた復興リーダー支援事業。リーダーを支える人材を「右腕」と呼び、1年間の長期ボランティアとして派遣。人件費として月約15万円はETIC、が負担。これまで計37人(うち福島県内には35人)を派遣した。30歳前後の若者が中心で大手や外資系企業からの応募も多い。

福島などの16人 佐伯へ

復興のヒント 「糶屋」に学ぶ

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興を担う人材育成に取り組み「ふくしま復興塾」の塾生らが18日、佐伯市を訪れ、全国的な塩こうじブームを巻き起こした糶屋本店で研修した。全国の先進事例を学ぶフィールドワークの一環。



浅利妙峰さん（右端）から塩こうじブームを巻き起こした裏話などを聞く塾生ら＝佐伯市船頭町の糶屋本店

古里愛にあふれる福島県 浅利妙峰さんと次男で10代在住者や出身者ら20〜30代 目の良博さん、三男で経営の16人が訪問。同店9代目 コンサルタント会社代表の

キーワードは温故知新

善然さんが講師を務めた。妙峰さんは、高度成長期に入り、みそなどは過剰時代から買わない時代になり、うじが売れなくなったが、江戸時代の文獻から「塩麴漬」の3文字を見つけ、研究を重ねて調味料として現代に復活させたことやブームの影響で業界の売り上げが年間2億円から62億円に急増したことなどを説明。「温故知新」という考え方が糶屋復興のきっかけをつくった。古いものに眠っている新しいものを輝かせることも必要だと話した。塾生らは復興のために自分たちでできることのヒントを探そうと真剣にメモを取っていた。東京都で建設会社を経営している高橋翔さん（26）は「地方から世界に発信している店の裏のエピソードが聞けて勉強になった。今日の話を生かし、福島復興の助けをしたい」と語った。同塾は昨年発足。年間を通して専門家の講義などを受け、各自が解決したい課題の事業計画を立てる。現在は2期生19人が学んでいる。県外研修は年一回で、本年度は同店を皮切りに佐賀県の武雄市と有田町を訪れる。（山田志朗）



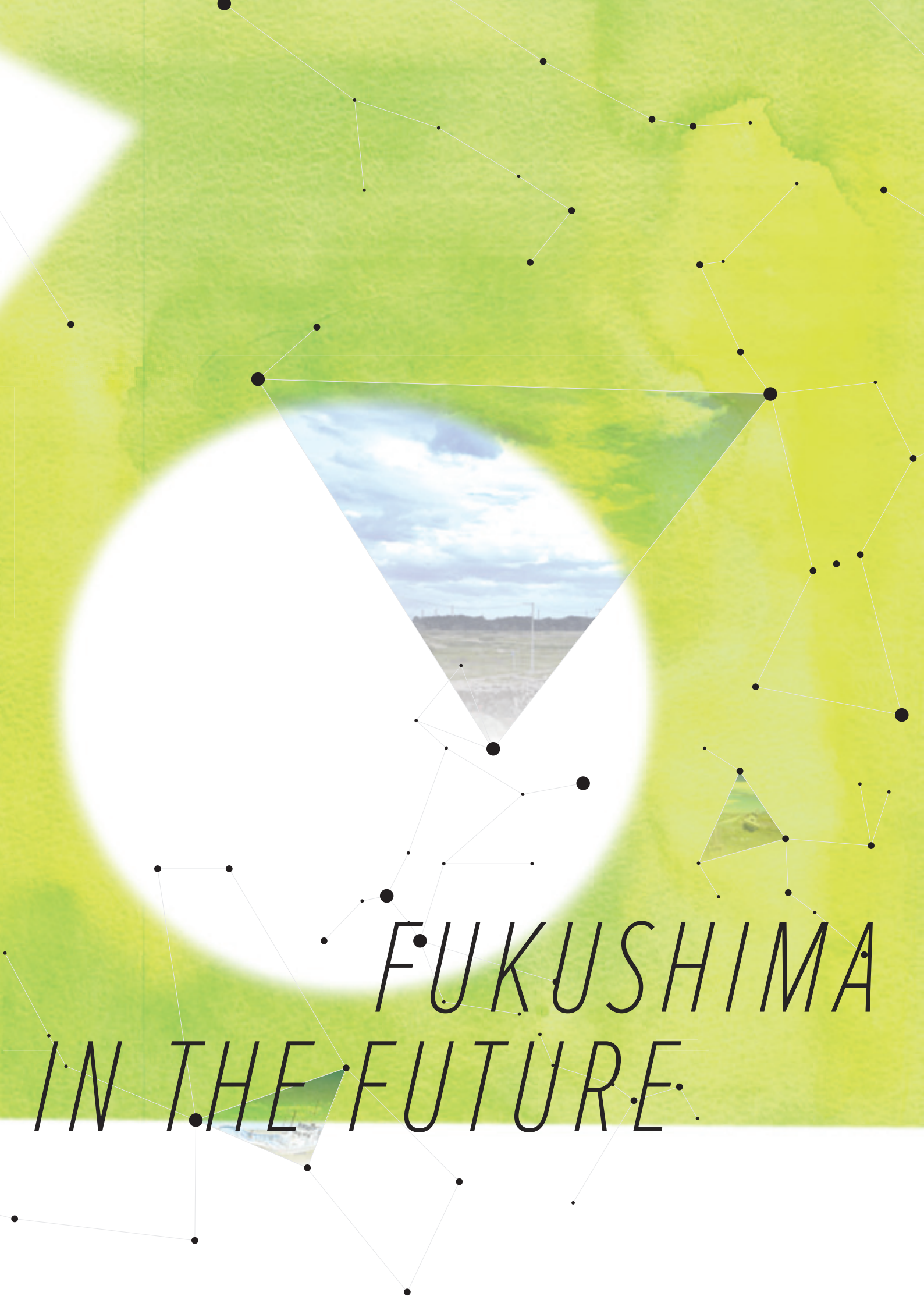
写真＝「地方から世界に発信している店の裏のエピソードが聞けて勉強になった。今日の話を生かし、福島復興の助けをしたい」と語った。

2014年度ふくしま復興塾事業報告書

平成27年3月発行

編集発行：ふくしま復興塾実行委員会
(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター内)
〒960-1296 福島市金谷川1番地
電話 024-504-2865
FAX 024-504-2865

印刷所：(株)日進堂印刷所



FUKUSHIMA IN THE FUTURE